

杉原薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生編

『歴史のなかの熱帯生存圏——温帯パラダイムを超えて——』

友部 謙 一

本書は大型研究プロジェクト「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」（京都大学、代表杉原薫、平成一九―二三年度）の研究成果報告を公開したものである。その性格に起因しているのだろうが、各研究領域の碩学（研究同人）による寄稿は興味深いテーマを読者に投げかけてはいるものの、エヴィデンスの提供と理論的考察の双方の面において、あとひと手間があればと思う章が多いという印象をもった。もちろん、紙幅の制約がその主因と推測する。講座生存基盤論シリーズの第一巻として総花的なボリューム——中心になりそうなテーマが多く、対象とする時間軸も長く、地域幅も広い——にならざるえないことは理解で

きるが、さらに序章「熱帯生存圏の歴史的射程」で各章の簡単な紹介が付され便利であるものの、記述全体が理論的となると読者はなかなかたいへんだ。宮本常一の民俗学にみえる小さな仮説と一つのエヴィデンスにより因果関係がもう少し軽快に記述されていたら、本書を手にする読者の印象もずいぶん違ったものになったのではないかと思う。こうしたことも含めて、ここで展開する本書の評価も自ずと限定的にならざるをえない。正直いって、本書に収められた論稿が当該章の研究テーマの完成稿であるといえるのは皆無ではないだろうか。それは本書がプロジェクトの研究報告であるからで、ほかに理由はみあたらない。その意

味で、以下に議論される内容は、評者の関心領域の範囲内で、さらに議論がある程度熟成され、評者の目から問題点が明確なものに限定されていることをお断りしておきたい。

これはあくまでも議論の熟成段階あるいは紙幅の関係に起因するものと思われるが、将来そうした要因が解決され、完成稿になり巡り会える機会を期待したい。また、以下に展開される評価においても、少々細かすぎる点多々あるかと思うが、これは本書の成果報告書という性格と評者の力量不足によるものである。こうしたことから十分に検討することのできない章もあるので、最初に本書全体の構成を記しておくことにしたい（カッコ内は執筆者であり、訳者は記していない。また、各編の最初にその内容が編代表者により紹介されている）。

### 序章 熱帯生存圏の歴史的射程（杉原薫）

第二編 生存基盤の歴史的形成―生産の人類史から生存の人類史へ―

第一章 エネルギー―人類最大の依存症―（A・W・クロスピー）

第二章 人類史における生存基盤と熱帯―湿潤熱帯・半

乾燥熱帯・乾燥亜熱帯―（脇村孝平）

第三章 人類史における最初の人口転換―新石器革命の古人口学―（斎藤修）

第四章 人間の生存基盤と疾病―生物進化と適応の視点から―（松林公蔵）

### 第二編 近代世界システムと熱帯生存圏

第五章 「化石資源世界経済」の興隆とバイオマス社会の再編（杉原薫）

第六章 生存基盤持続型発展径路を求めて―「アジア稲作圏」の経験から―（田中耕司）

第七章 大ヒマラヤ分水界―中国、インド、東南アジアの水不足、巨大プロジェクト、環境政治―（K・ポメラントツ）

### 第三編 モンスーン・アジアの発展径路と日本―発展を支えた農村制度に着目して―

第八章 モンスーン・アジアの発展径路―その固有性と多様性―（藤田幸一）

第九章 日本における小農社会の共同性―「家」・自治村落・国家―（大鎌邦雄）

第一〇章 熱帯アジアの森林管理制度と技術―現地化と普

遍化の視点から―(生方史教)

第一章 日本の森林管理制度と林業技術(岩本純明)

第四編 熱帯における生存基盤の諸相―植民地支配・脱

植民地化・石油依存―

第二章 豊饒、瘴癘、そして貧困―熱帯アジアへの眼差

し―(籠谷直人・脇村孝平)

第三章 アフリカの農家世帯の脆弱性をどう捉えるか

(島田周平)

第一四章 現代中東・イスラーム世界の生存基盤―石油依

存の帰結と属人性原理の復興―(小杉泰)

終章 多様性のなかの平等―生存基盤の思想の深化に向け

て―(田辺明生)

執筆者紹介

索引

このように相当な分量の目次、それぞれに独自の用語、さらに長い副題が踊ることからもそれだけで読者への負担も小さくない。そのためか、各編の最初に「ねらい」(各章の解説)が編代表者により付されている。これは親切で便利であるが、時に編代表者の意見が中心になる場合もあ

る。いずれにせよ、出版編集にもう一工夫ほしいところである。さて、ここから本格的な書評作業に入るが、まず個別の章について少し細かな議論をさせていただき(ただし、章の内容紹介は編のねらいに記載されているのでできる限り省略した)、最後に総論あるいは本書の展望に関する感想と要望を述べたいと思う。

第一章での議論の展開の仕方はたいへん勉強になる。議論する仮説や問題があまり大きくなることを防ぎ、できるだけ小さな因果関係に収斂させ、身近な考えやすいエピソードを加えて、信憑性を補強する方法である。首尾一貫した議論(因果関係の設定)と明瞭なエピソードは読者に瞬時に「納得」を提供している。これが社会科学では大切であると評者は考える。内容は「ねらい」に簡潔にまとめられている。

第二章の議論のなかで、本書において重要な議論・用語であるはずの「生存」の意味がはじめて本格的に語られている。予想通りK・ポランニーの自然環境と人間との総合的な交渉・経済の substantive な定義に根っこがあった。ポランニーはそこでの取引様態を市場・互酬・再分配とわざわざ分類しているわけだから、当然ここでも市場交換に

関する議論がされてしかるべきと思う。本章は全体的にきちんと書きあげられている章であり、ミクロ寄生など人類の移動と定着の差異に着目しているにもかかわらず、市場とそれ以外の取引との違いが語られずに「生存」が議論されていることは少々残念である。ポランニーは最終的に市場を人類社会の異質な部分として排除する方向を選択したが、それは政治的選択としても明らかな誤りであった（社会主義社会の崩壊現象）。人類は市場とのかかわりを古来より意識的に志向してきたが、それだけですべての取引が解決されるわけでもないというスタンスが今日の先進資本主義社会に暮す人々にまさに求められている。そうした要請と本書の歴史のなかの「生存」がどのように絡んでいるのかを知りたかった。移動をテーマとする章だけに感染と市場の関係性究明への期待も大きい。また、まともに記された「熱帯」認識の問題も一九世紀のヨーロッパの植民地主義の展開との関係のみならず、二〇世紀初頭の日本の社会科学（民俗学を含む）で議論された「南方論」や「南島」

イデオロギー（ニライカナイやまれびと）の発生、あるいは稲作文化の南下論／北上論など話題に尽きないテーマであるだけにそのことにも触れてほしかった。日本とヨーロッパ

の熱帯認識の違いは、そうした精神性や精神風土の違いに起因しているのではないだろうか。

第三章も定住と移動を検討要因に含む重要な章と思う。新石器革命と人口変化というテーマ自体、考察範囲面積（時代範囲×地域範囲）がすこぶる広く、読者には扱いにくい。筆者もおりに触れ日本の事例を持ち出し、ギャップを埋める作業を行っている。時代をどう呼ぶのかという相違もあるが、日本列島弧を舞台にすると縄文時代から弥生時代への移行期を含む人口変動（最初の人口転換）を考えていることが本章のテーマであると換言できる。それは要するに狩猟採集社会から定着農耕社会への変化という大きな社会文化の転換移行期の問題でもある。日本ではとくに三つのルート（南海ロード、オアシスロード、ステップロード）を介した大陸系その他の移民（弥生人と総称する）の縄文人社会への移住と混血化が積極的に進行していたというのが人口転換の背景にある事実だと思う。本章の議論の道筋は明確で疑問の余地はないが、図3-1などに表示される指標は相対値（出生／死亡率）であり、今ひとつ実際のイメージがつかみにくい。日本の考古学での古人口学の進展も目を見張るものがあり、縄文系集団と弥生系集団のそれ

それぞれの推計人口増加率は実数推計値に基づき明確に計算されている。縄文人系集団の年人口増加率は〇・一％以上と推計され、これは通常の狩猟採集人口集団よりも相当高い数値のようだ。おそらく、縄文のある段階で稲作などの農耕が取り入れられていたからだと思われる。それに対して、北部九州系の弥生人系集団の年人口増加率は一％以上になることが推計されている（表3-2の農耕民と狩猟採集民の合計出生率の差が小さいことは再考を必要とするかもしれない）。つまり、これら二つの人口学的な性格の異なる人口集団が混血化するとき、どのような人口転換が形成されるのかという議論であれば、新石器時代とはいえ身近に感じられるのではないだろうか。ホモジニアスな人口集団が遙か昔の新石器時代にどのように人口転換を経験したのかという設定だとしたら、その理解はなかなか難しいだろう。また、人口の移動径路についても、南海ロード（中国広東省や福建省を経由した航路）に注目しがちであるが、日本の古代史まで考察範囲を広げると、一時期のオアシスロード（砂漠地帯通過ルート）人気はさすがに静まり、最近では古代ペルシャ、サマルカンド、モンゴル北部を経て中国北部、朝鮮半島から北部日本列島（北海道を含む）へ到達する人

口・文化移動ルート（ステップロード）の重要性に光が当てられている。そうなると弥生人系集団といえども広範囲な人種・民族を含んでいることになり、定着農耕民族のみならず騎馬遊牧民族的な要因も考察に含める必要があるだろう。本章では、ヨーロッパ、アメリカ大陸、タイのそれぞれの事例が持ち出され議論されるので、読者はその内容整理に少々手間だろうが、必要な人口学的要因とその帰結の変数は周到に語られており、レファレンス指標や数値にあまりいまいな点はほぼなく、人口移動の重要性にもふれ、その意味では信頼のおける議論となっている。

第四章の議論はたいへんスケールが大きいかかわらず、記述表現は第一章と同様にたいへんわかりやすく、図表も効果的に表現、使用され、さらにレファレンスに供される個別題材も身近で興味深い。テーマに縁の遠い読者でも面白く読みすすめる議論である。パプア人の高血圧化を扱った箇所で、高血圧化しない中央高地の事例解説が周到な一方で、高血圧化する沿岸村の事例の解説がほとんどないことは高血圧化で悩む日本人にとってはいささか興ざめである。筆者は医学研究者であるが、社会学者がどのように効果的に分析結果を表示し、説得的に議論を進めてい

くかを考える際に、たいへん参考になる章である。

第五章については、内容は脇におくとして、使用されている図表の表示や本文での扱いに問題が多いのが気になった。たとえば、表5-1の表頭にある固形燃料、液体燃料が何であるのか、また網掛け部分は何を表現しているのかなどが表を見ただけではわからない（本文を読んでもわからないこともある）。作表はそれだけで読者が内容を読解できるようにするべきであろう。また、図5-2を含む議論では、一九七〇年代前後にトレンドの非連続性があると指摘しているが、その図を見るかぎりその周辺で断絶があると読みにくい。おそらく縦軸のスケールのとり方の問題によるのだろうが、たしかにスケールをかえると（図5-3、一五八頁上から九行目の横軸は縦軸の誤りではないか）、断絶が強調されるようになる。しかし、そうであれば図5-2（連続性の強調にしかみえない）の意味は何であるのか。さらに、本文一六九頁以降に集中的に現れる「GDP当たり供給量」という表現であるが、表5-3の表頭では正確に「GDP千ドル当たり供給量」と記載されているにもかかわらず、本文ではつねに「GDP当たり供給量」と記載されている。これは読者を混乱させるので正確に記述してほ

しい（図5-8でもそのように記載）。自戒を込めていうと、数量に関心をもつ経済史研究者は、図表の表示と本文との関係に最大限の注意を払いたいものである。

第六章は内容的にはたいへん重要な章であると思う。アジア稲作圏には当然日本も入るわけだから、それが南から北へ伝播したという認識は容易に共有できる。しかし、稲の多期作と多毛作化は全く異なる現象であり、多毛作化には何よりも湿田を乾田化させる灌漑設備の補填が必要条件となる。これをアフリカでは小農農家経営の持続的な改良で行ったという視点は興味深い。たしかに、宮本常一が日本農村をくまなく歩くなかで、かれが強調したことは棚田化された水田において予想以上に暗渠排水が農民の伝統技術により張り巡らされていることであった。それこそ農家の独立と村請制が長い期間をかけて築き上げてきた技術革新であったことを考えると、それをアフリカ農村でもみられるのは驚きである。

第七章の話題は水資源の活用変化の影響についてである。内容的には興味深いが、同編他章との関係の解説が必要かもしれない。それ以外に印象に残るのは、ハイテク／ローテク、ゴースイン、チャイナパワー（中国電力国際発展有

限会社の訳語として）、～インチ（～mm）の繰り返し表現、低ダムというような訳語や用語の表現はこれでよいのだろうか。翻訳掲載から派生した問題であるが、きちんと検討すべきである。

第三編はいずれも日本の事例をテーマとした興味深い章を含んでいる。編内では使用する専門用語などの意思統一が事前に図られている点で、他の編とは異なる好印象をもつ。しかし、同時代同地域を専門とする評者として、いささか違和感をもつ箇所も多々あった。ただ、この議論には相当な紙幅と準備が必要であり、今回の書評では残念ながらそれは行えない。そこで代表的かつ単純な事柄の指摘にとどめたい。まず、編代表者の「ねらい」にある「インドでは大いなる分岐（一八世紀）以前にすでに工業化が相当進んでおり」とあるが（同著者の章でも同じ記述がみえる）、もし字義のまま解釈すると、インドが最初の工業化に成功した国となるがこれでよいのであろうか。いずれにせよ、より正確なコンテキストの記述が必要である。あるいは、農村手工業化やプロト工業化などの特定化が必要なのだろうか。つぎに、日本が近世以来小農社会の形成を中心に高度に発達した経済社会の成立をみたところがあるが、「高度に発

達した経済社会」とは何であろうか。しかし、きわめて重要な指摘もなされている。温帯パラダイムから熱帯パラダイムへとという方向性が本書の新基軸であるが、本当にそうかという真摯な態度である。モンスーン・アジアあるいはステップアジアを含めたアジア地域では、有史以来「南下」論にはつねに他民族の侵入・征服の歴史が付きまわっている。北半球であるかぎり、南下の最大の理由は、温暖な気候と安定した生産をもとめたいわゆる「楽園」志向であろうから、当然だろう。本書にそうしたイデオロギー志向がないことは承知しているが……。

第八章では、後期封建制下、対外交渉能力をそなえたムラ（自治村落）、上部構造、商品経済という古風な表現がある一方で、「勤勉革命径路」など比較的新しい用語も登場して、いささか竜頭蛇尾の感もいなめず、日本経済史という学問研究の複雑な歴史的径路を表現しているのかもしれない（このことは第九章でも同じ）。明治以降の「自治村落」としての部落（藩政村）という記述（二八九頁）は、時代錯誤的な表現と誤解される可能性があるため、正確な記述を望みたい。また、注三八（二九九頁）の内容（タイでの胃潰瘍などの消化器系病気の増加）はさらに丁寧な説明

が必要である。

第九章については、内容的な議論をするにはとても紙幅が足りないので、体裁に関する指摘にとどめたい。江戸時代を専門にする一研究者にとって、「自治村落」という表現で江戸時代の村と明治期以降の村をどのようなコンテンツにおいても連続的に議論できるようなスタンスには疑問を感じる。それが中世に起源をもつものであればなおさらである。それに関連しているのが、明らかに複数の時代性をまたいだ議論をする際に、どのような用語を使うのかを、もう少し気にしてほしい。さらに、レファレンスが付されている箇所と付されていない箇所の密度の差が大きい。おそらく、紙幅以上の無理をした議論がされているからだと思う。東アジア三カ国の伝統とその機能に関する比較史を志向する筆者ならではの悩みと問題であると思うが、そうであれば、記述の仕方と構成を最初から再考すべきではないだろうか。

第一〇章は、「現地化」と「普遍化」という二つのカテゴリ分類を前提とした議論であるが、結論は当たり前であるとの印象を強くした。双方の概念のさらに詳細な分類とそれぞれの対立内容があまり出されてくると、たいへん

興味深い議論になると期待できる。そのためには、分類指標の視覚化というデジタル・データ化が何よりも必要ではないだろうか。紙幅の関係で省略されたのだろう。

第一章はきわめてオーソドックスな制度編年史である。第二章は温帯での経済発展の技術パッケージ（効率性追求型発展経路）を熱帯の成長パターン（生存基盤確保型経路）へ移転させた際に、どのような問題が発生するのかについて議論している。熱帯マラリアの拡散経路を考えると、アノフェレス（媒介蚊）だけに注目するのではなく、ヒューマンファクター（栄養状態や労働移動）も重要な要因であると指摘は興味深い。食糧、原材料供給、就業など市場取引に引き込まれると、人間—自然環境関係の「生存」がどのように変化するのか、その好例が本章には示されている。

第三章では、アフリカ農民の脆弱性が指摘される。興味深いことは、江戸時代の農家世帯とほぼ同じ脆弱性に直面していることである。森林破壊（共同地破壊）、ライフコースによる労働強化（過剰な死）、そしてマイクロファイナンスの停止などである。江戸時代の農村は、村や藩と一体化して、全体としてそれらをうまく救ったといえるだろう。

う（もちろん失敗例はある）。これに関する個別の歴史研究は今まさに、若手の研究者により進められている。市場取引を改善していくこととライフサイクルの危機管理を村や藩と共同して行う仕組み（村請制）をつくり安定化させることが鍵を握っていたように思う。

第四章と終章は、内容的に特段意見をもたないが、個人的にはアマルティア・センの前期のインドの農民・農村の実証研究と後期の生存・生活の哲学的研究（HDI指標の基礎的思想）の関係性に着目した研究があれば、本書の究極テーマである「生存」の問題もさらに明確になるのではないだろうか。いずれにしても農民やそれを主体とした途上国が経済グローバル化という舞台の中心に向かいつつあることは確かである。

最後に本書全体の感想を述べたい。編者ならびに執筆者の学識の深さは、誰いわずとも本書を読めば一目瞭然である。とくに、多くのテーマを抱え込む「生存」や「熱帯」、さらに温帯パラダイムとの比較作業といった近代史の総括的な問題を正々堂々と議論し、活字化した功績は大である。ただ、同時に、本書において不足する点や改善すべき内容も明確になったように思う。私見にすぎないことをお断り

したうえで、不足する点と改善点を述べたいと思う。

まず、「生存」を考える際に、取引の原初的形態とその発生態様について総合的な研究が必要であるという点だ。市場取引、互酬、再分配という取引態様の分類が適正かどうかは別として、人類史全域にまたがる取引データベース（分類可能で共同利用可能）がないと、ポランニー以来の市場に関する議論の深まりが望めないということである。市場の定義は難しいからそこから逃げてきたのが古い社会学であるとするれば、新しい社会学の任務はおのずと明らかである。そのためには、最先端のIT（情報技術）を積極的に駆使した研究にしていかなないと意味がないということでもある。本書に不足する点があるとすると、最新IT利用と共有データベースの存在感が明示的に感じられないことではないだろうか。これは技術的な課題に他ならないが、社会科学の大型研究プロジェクトの存在証明でもある。つぎに、内容的な課題としてまず思いつくのは、本書のタイトルを見た多くの読者は、おそらくそこに「人口移動」が分析・考察されているのだらうと想像することだと思うが、本書においてそれが明示的かつ中心的な考察概念や分析課題になりきっていない点である。もちろん、「熱

帯」の感染症や人口転換の議論では、積極的にその重要性が説かれているが、そこでもそれ自体をテーマとした分析考察にはなっていない。細菌やバクテリアの移動性(宿主や媒介者の移動)と市場は表裏一体である。さらに、それらと生存もほぼ同値になるのがグローバリゼーションの中身でもある。それでも、「生存」独自のスペースがあり、それを大切にするにより人間の経済や人間性の哲学が回復・持続するのであれば、それが求めるべき人間の幸福の中身であることもまた確かである。

つぎに、柳田國男・折口信夫・宮本常一・谷川健一へとつらなる日本民俗学の成果を取りまとめた一篇がなかった点である。それが熱帯への着目では自然科学につぐ歴史をもち、本書のテーマをみると歴史研究と民俗学の協同関係が最大限発揮される場面でもあっただけに残念である。

最近読んだ柳田國男に関する本(『柳田國男の恋』岡谷公二著、平凡社、二〇二二年刊)のなかで、柳田が資料採集者(インフォーマント)に集める資料にいかなる解釈もしないことを要請したこと(科学を屈指したこの真摯な態度が横柄であると誤解されたようだ)、しかしそうした解釈の手垢にまみれていない資料の山にあって民俗学方法論の確立に相

当苦悩しながらも、結局それに失敗したことが指摘されていた。その理由は、概念化や総合化あるいは方法論の確立には、相当な量の質の良いエヴィデンスが必要なことはいうまでもないのだが、柳田が収集した資料の量は、その時代にあつて一個人の頭の中で考えうる量をはるかに超えていたからではないだろうかと思つた。帰納論による民俗学の科学化を屈指した柳田らしい失敗でもある。しかし、いまやこうした一個人の能力に起因する危惧はITの開発により、ほとんど解決されているといつてよいだろう。良質で大量なエヴィデンスを収集・分類して、共有データベースとして世界の研究者が活用することで解決される問題も多いと思う。本書が世に問うた中心的な課題はまさにそうした類いの問題である。研究者はもはや柳田國男のように悩む必要はなく、また概念化・総合化を急ぐ必要もないだろう。

近い将来、本書の基盤を形成するプロジェクトにおいて、そうした大量のデータが蓄積・共有活用されながら、再度「歴史のなかの熱帯」が語られることを心から願っている。

杉原薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生編『歴史のなかの熱帯生存圏―温帯パラダイムを超えて―』講座 生存基盤論 第一卷（京都大学学術出版会、二〇一二年五月刊、A5判、xiv 十五三六頁、本体価格四、二〇〇円）

（ともべ けんいち・大阪大学大学院経済学研究科教授）